

時の経過が、嫌なこと、辛いことを忘れさせてくれることがあります。しかし一方で、逃げても逃げても追いかけてくるような過去の忌まわしい体験や心の傷に苦しめられることもあるのではないのでしょうか。塩谷直也さん（青山学院大学宗教主任）と学生との対話に次のようなものがあります。「物事から逃げて、逃げて、逃げまくるとどうなりますか?」「もとに戻るよ。地球は丸いから。世界中どこに逃げて、日の照る限り、自分の影はついてくる。入院患者が、病気から逃げようと病院から脱走しても、残念ながら病気も一緒についてくる。同じようにどこに逃げて、自分の抱えた問題はついてくる。どこに行っても逃げられないものならば、ここはひとつ正面から向き合いますか。…神様も一緒にいて、助けてくれるというのだから」。その点で言うと、主イエスの生涯について記された「福音書」は、あまり思い出したくない、向き合いたくない、出来ることなら逃げ出したい、そんな現実へと読者を連れ戻していくことでしょうか。なぜなら、福音書が読者を最終的に連れて行くところは、ゴルゴタの丘、イエスの十字架だからです。どれだけイエスを慕い、彼に何の罪も見出せなかったとしても、自分の命が助かるために、自分の立場を守るためには、イエスに死んでもらうしかなかったという悲しい結末…読者は自分の抱えている傷や破れの体験を思い起こし、それと向き合うように促されていきます。

本日の箇所、ユダヤ当局は、大祭司カイアファの提言により、イエスを殺す計画を立てました。イエスの存在によって、ユダヤ社会のお手本とされていた自分達の破れや弱さが露わにされ、それによって信頼を失い、ユダヤ社会の秩序が乱されるのを恐れていたからです。そして実際、彼らの計画通り、イエスは逮捕され、十字架で処刑されていきました。しかし、福音書記者ヨハネは、イエスの十字架死が、彼らの計画によってではなく、神の計画の中で実現したことを示唆しています（51～52節）。イエスの十字架死には、神の意志が示されているという訳です。それは、やがて人間がたどり着くところ、自分の破れや弱さが露わになるところで神がかかわって下さる、十字架の傷跡が残った手足をお見せになり、「あなたがたに平和があるように」（20:21）と待っていて下さる主イエスの姿でありましょう。そのような神の愛と赦しの中で、私達は、過去の忌まわしい体験や心の傷と向き合い直す場所が用意されています。そしてその場所から、主は、赦される喜びを他者にも届けられるように（20:23）、私達を創り変えようとなさるのです。

（文責：望月達朗牧師）

